

外・歴史文学研究』(おうふう)は、近代文学の分野ではその見識の高さで知られるやまなし文学賞を受賞された。ひそかに思うに、山崎先生は、はじめから二生の人たる道をめざしたわけではあるまい。跡見が山崎先生を二生の人たるべく望んだのであって、学部学生時代以来の、一貫した着実な森鷗外研究の成果が高く評価されたことには、たいへんお慶びがあったにちがいないと、同慶、祝福の念、禁じがたいものがあつた。

大学の定年は迎えられたが、学園はなお、先生を必要としている。これからも、二生の人としての道を歩んで、私たち全体の師表たる姿を長く示しつづけていただきたいと思う。

* * *

山崎一類先生のこと

文学部人文学科教授 村松加代子

私が本学に赴任したのは一九七九年四月、山崎先生が学長にな

られた半年後のことでした。全国の私立大学で最年少の学長でいらつしやるということで、確か翌年一月の皇室の歌会始へのお招きを受けられたと記憶しています。忝くも、菊の御紋のついたタバコを一本、おすそ分けに頂いたことを覚えています。

今にして思えば、四十歳の若き山崎学長を頭に跡見の青春時代とても呼ぶべきリベラルな雰囲気の中で、私は専任教師としての第一歩を踏み出しました。教授会でも喧々譁々、そのあとは学科の垣根を越えて連れ立って飲みに行く。私は幼い二児を家に残しての共働きの身でしたが、運命共同体の新参者としての気負いと責任感(!?)から、教授会後の飲み会にはほとんど毎回参加しました。それでも、疲れというものを知らず、あの頃は先生がたが実に生き生きとしていて、それぞれに個性を発揮していたように思います。ゼミ旅行も盛んならば、非常勤の先生との親睦会も各学科の年中行事の一つでした。教職員・学生が一丸となって大学を作っているというような雰囲気が学内に満ち満ちていました。今にして思えば、大学に氷河期が来ようとはつゆ思わない暢気でおおらかな時代でした。結局、私は勤務年数の半分以上を山崎体制のもとで過ごすことになりました。

さて、ここで話を私の赴任時に戻してみますと、山崎先生はち

ようど学長室へ引越されたばかりで、そのために空き部屋となった先生のご研究室（今の保健センターの隣）を私が使わせていただくことになりました。ちなみに、当時のキャンパスには一号館、寮、それに合宿舎がなく、研究室は原則二人部屋、中には三人部屋もいくつかありました。私は、ルームメイトの男性教員に向って、男女七歳にして席を同じゅうせずと羨けられたのになあなどと嘯いたものです。女性教員はたったの四人、私が最年少でした。

つい先日まで山崎先生が座っていらした椅子に座り、お使いになつていた机に向つていたある日のこと、先生が学長室から今は私の研究室に訪ねてみえて、まだ引越しの済んでいない蜜柑箱の山については早めに引き取るからとのご丁寧なご挨拶をくださいました。そのとき部屋一杯に広がつていた陽射しとともにあたたかな未来を予感しました。

その後先生とは偶々、いくつか関心事を共有することがわかりました。まず、出身学部と大学院が同じということ、研究対象としては、先生におかれては森鷗外、私の場合は英国のブルームズベリー・グループ、わけてもヴァージニア・ウルフという作家です。両者とも、日英それぞれの国において、二つの時代・

二つの文化の転換期に苦闘し、橋渡しの存在ともバイオニア的存在ともなった作家たちです。鷗外が西欧体験をした明治の知識人の責務として、日本の近代化・民主化に尽力する一方、ウルフの仲間たちは、いわば、ヴィクトリア朝で鍛えぬいた武器をもつてヴィクトリア朝の家父長制に挑戦状を突きつけた人々でした。山崎先生が史伝、歴史小説へのご造詣を示される一方、私のほうも、日本とは比較にならないほど高いステイタスを誇るかの国の伝記文学というジャンルが気になつてならないという具合です。鷗外が史伝『洪江拙斎』を表わしたのは一九一六年、そして、ウルフの仲間が伝記文学に革命を起こしたとされるリットン・ストレイチーの『ヴィクトリア朝の名士たち』が出版されたのがその三年後です。そうした話題やもう一人の洋行帰りの明治の知識人にして英文学者・漱石のことなど、先生は未熟な私の意見にも耳を傾けてくださり、ともに雑談に花を咲かせることもありました。

二〇〇三年、サバティカルをいただいてロンドンに暮らしていたある日のこと、先生から一通の手紙が舞い込みました。それは跡見の現況に始まつて、ある調べ物のご依頼で締めくくられていました。私はお役に立てることが素直に嬉しく、学長職の激務をよそに自分が研究三昧の暮らしをしている申し訳なさど感謝の念

で、先生の出先機関よろしく任務遂行に燃えました。そして、鷗外が留学先のドイツから帰国の途次に立ち寄ったロンドンの、先生がまさにその年と限定された地図を探し当て、あるいは、普段は横目を通り過ぎるばかりの王室・要人を遇してきたランガム・ホテル (The Langham Hotel) に赴き、重厚なその雰囲気は圧倒されながらも、ホテルの関係者 (これまたなんとというヴィクトリア朝的風貌!) の口から、鷗外宿泊当時の様子を少しでも聞きだそうと努めたりもいたしました。とはいえ、その成果については、先生の期待値の方が上回っていたかもしれません。

ところで、大学の運営をめぐっては、教授会の一員として学長と意見を違えることも当然ありました。けれども、理想を熱く語り、必要とあらば潔く決断なさるそのお姿には、ある種の人生の美学といったものをも覚えておりました。そして、意を異にする場合も、どこか最終的な大きなところでの信頼は失わずにいたように思います。

さて、誉めついでに——組織の長として激務の身でありながらも、常に学究を貫いていらつしやるそのお姿にはいつも敬服しておりました。何頁にもわたる先生の研究業績表と学界での高い認知度がそれを語っています。津和野郷土館の鷗外コーナーを訪れ

た折も、ガラスケースに収まる先生のご著書を目の前にして、自分の業績でもないのになんだか得意な気分になりました。いつもあれこれのことに関心と時間を分散させ、克己心にも乏しい私は、研究者として先生の足元にも及びません。

そこでここからは、先生のご著書『森鷗外 明治人の生き方』(ちくま新書、二〇〇〇) に拠りかかりながら、綴らせていただきたいと思えます。これは、私の表現力の貧しさへの言い訳になると同時に、本書の中で冷徹かつ熱く語っていらつしやるそのお言葉そのままが、山崎先生その人を一番語っていると思えるからです。鷗外を語りながら、じつは最も深いところでご自身を語っていらつしやる。ちょうど、私がふと気づいてみれば、いつしかウルフを人生のモノサシとしてきたように。

先生のありようをとてもよく伝えていると私が考えるのは、例えば、つぎの一節です——

昼は官界で任務遂行者としての、夜は表現者としての顔を
持つている。昼の官事は精神を消耗させる。その消耗した、
或いは脆弱になった精神を蘇生させるのが表現行為である。
それは昼の怒りを鎮め、己を救済するものである。そして、

この二分された生をいかに統一するかに腐心する。(二三五頁)

この一文とともに、早朝あるいは夜遅くに、克己の心をもってご自宅の机に向っていらつしやる先生のお姿がおのずと浮かんでまいります。

先生はまたべつのところでも記されています、「教養人は異業種間の分野で発言ができ、それぞれの話題の領域において、一家言を持っている人をいう」(四頁)。これによれば、二学部・五学科を擁する本学は、本来、学際的な話ができる理想の場たりえるのに、大学全般の置かれた厳しい状況が物理的にも心理的にもそれを困難にしているのは、とても惜しいことに思います。

さいごに——山崎先生とは、たとえ本学でのご縁が無かったとしても、ご著書を拝読しただけでも、ぜひお会いしてご意見を伺ってみたい、話し合ってみたいお人であると思つたことでしょう。そのような先生と実際に三十年という長きに亘つて職場をご一緒できたことは、じつに幸運だつたと思つています。

最後になりますが、山崎一穎先生、今日までいろいろご指導くださいまして、ありがとうございます！四月からは茗荷谷キ

ャンパスでお目にかかれますことを楽しみにしております。どうぞ、「一身にして二つの生涯」を御身お大切になさりながらお過ごしくださいますように。

* * *

自由の人文主義者たる山崎さん

文学部人文学科教授 神山伸弘

山崎一穎さんとは、赴任当初から教授会でも飲み屋でもさまざまなお話を語りあつたが、なによりも、学問で真理を探究するその姿勢の真摯さにおおいに感銘と刺激を受けた。

私の専攻分野は哲学・政治学だから、私が森鷗外について書くなどとは、ベルリンに留学(一九九六・九七年)するまで夢にも思わなかつた。それまで、山崎さんが鷗外研究者であることは知つていても、鷗外についてはお話を拝聴させていただくだけにとどまっていたと思う。その学問的な問題意識の真諦をつかむこと